

植民地時代の「府」と解放後の「市」

中川 雅彦

今日、韓国でも朝鮮民主主義人民共和国でも最高級の地方行政区画、日本の県に相当する単位は「道」であり、その下に「市」「郡」がある。道と郡は朝鮮王朝時代から引き続き使われているが、市は、一九四五年八月に解放を迎えてから初めて使われるようになったものであり、それまでは「府」と呼ばれていた。ここでは、府が設定され、市に改称されていった過程から、府が市になった理由を探ってみよう。

方行政単位が「府」になったのであり、今日の市に繋がるものではなかった。一方、「郡」は今日に至るまで用いられている。翌一八九六年に、八月四日付勅令第三六号によって、二三個の府が廃止され、代わって一三個の道が設置された。このときの道の区分けは現在の道制の基礎になっている。さらに、郡には五段階の等級が設定され、その一級の郡のうち、廣州、開城、江華、仁川、東萊（後、釜山）、徳源（後、元山）、慶興は「府」とされた。また、首都の漢城は、京畿道のなかにありながら、「漢城府」と別格の扱いにされた（参考文献②）。現在の市に相当する地方行政単位の名称として「府」が用いられたのはこのときが最初である。

を転換して開港した場所であった。東萊の釜山港は一八七六年八月二四日に、元山港は一八八〇年五月一日に、仁川港は一八八三年一月一日に開港していた。そして慶興郡は一八八八年に締結されたロシアとの条約によって八月二〇日に開市（貿易市場として開放）された場所であった。郡の等級分けの基準も、廣州、開城、江華が府になった理由も不明であるものの、開港地と開市地については都市開発が予見されており、行政上の重要性が意識されていたといえる。

その後、朝鮮が大韓帝国に国号を改称した一八九七年の一〇月一日に木浦と鎮南浦が開港されたが、これに先立って、木浦港のある務安郡と鎮南浦港のある三和郡が同年九月一二日付勅令第三〇号で、府に昇格された（参考文献③）。一八九九年五月一日に群山、城津、馬山が開港されると、五月六日付勅令第一六号によって群山港のある沃溝郡、馬山港のある昌原郡が府に昇格され、吉州郡の一部であった城津は吉州郡から切り離されて城津府とされた（参考文献④）。一八九九年一月一三日に平壤が開市されると、平壤郡は一九〇〇年九月四日付勅令第三〇号によって府に昇格された（参考文献⑤）。こうして一九〇〇年までに朝鮮には都合一四個の府が設置されたのであるが、それらの府は都市としての開発は進まなかった。経済学者として著名な高等商業学校の福田徳三教授は一九〇二年七月に、大韓帝国に現地調査に入り、翌〇三年から〇五年にかけて『内外論叢』に「経済単位発展史上韓国の地位」と題する論文を連載したが、都市に関して「韓国の都邑は未だ常設的市場の地位を脱せず」と述べている（参考文献⑥）。

●朝鮮王朝時代の府の設置

朝鮮半島で「府」という行政区画の名称が最初に用いられたのは、一八九五年に朝鮮王の五月二六日付勅令第九八号によって、全国を二三個の「府」で区分し、その下の行政単位の名称を「郡」に統一したことである（参考文献①）。このときは日本の県に相当する地

八個の府のうち、仁川、東萊、徳源は、一八七六年の日朝修好条規の締結によって朝鮮が鎖国政策

その後、朝鮮が大韓帝国に国号を改称した一八九七年の一〇月一日に木浦と鎮南浦が開港されたが、これに先立って、木浦港のある務安郡と鎮南浦港のある三和郡が同年九月一二日付勅令第三〇号で、府に昇格された（参考文献③）。一八九九年五月一日に群山、城津、馬山が開港されると、五月六日付

開発が進まないどころか、一九〇三年七月三日付勅令第二五七号により、開港地、開市地の府はすべて郡に降格されてしまった（参考文献⑦）。これにより、府は首都の漢城府のほか、廣州府、開城府、江華府のみになった。保護国化により設置された韓国統監府が一九〇六年二月一日に事業を始

表1 朝鮮の都市人口
(1944年総督府発表)

京城府	1,114,004
平壤府	389,105
釜山府	334,318
清津府	234,388
仁川府	220,242
大邱府	210,914
興南邑 ^(注)	163,403
新義州府	127,706
元山府	122,185
咸興府	119,279
城津府	87,172
海州府	81,720
鎮南浦府	81,187
開城府	80,017
光州府	78,953
木浦府	72,145
大田府	69,732
全州府	64,909
群山府	56,036
馬山府	54,306
晋州府	53,709
阿吾地邑	46,532
兼二浦邑	45,038
済州邑	44,210
沙里院邑	42,732
麗水邑	42,125
清州邑	41,242
春川邑	38,683
統營邑	38,639
羅津府	38,597
端川邑	36,689
水原邑	36,146
浦項邑	35,251
江界邑	35,183
金泉邑	35,081
順天邑	34,406
新浦邑	34,037
尚州邑	33,521
忠州邑	32,255
北青邑	31,827
三千浦邑	31,391
吉州邑	31,352

(注) 興南邑は1944年12月に興南府に昇格。
(出所) 『朝鮮総督府統計年報昭和19年』。

めると、地方制度の見直しにかかり、開港地、開市地を府に昇格させることになった。同年九月二八日付勅令第三五七〇号によって、開港地、開市地である仁川郡、沃溝郡、務安郡、昌原郡、東萊郡、徳源郡、城津郡、三和郡、慶興郡が府に復帰するとともに、一九〇四年二月二五日に開港した龍岩浦港のある龍川郡、同年三月二三日に開市した義州郡が府に昇格した。港もなく開市場もない廣州府、開城府、江華府は郡に降格された(参考文献⑧)。ただし、開市場であった平壤郡が府に復帰しなかった理由は不明である。

一方で、大韓帝国では鉄道の建設が進められ、人々の生活に大きな変化をもたらされるようになった。一九〇五年五月二五日に漢城府に隣接する永登浦(後、ソウル市に編入)と東萊府草梁を結ぶ京釜線が開通した。一九〇六年四月三日に漢城府に隣接する龍山(後、ソウル市に編入)と中国との国境の義州郡新義州を結ぶ京義線が開通した。一九〇八年にはこの京釜線と京義線の両線が連結されて朝鮮半島を縦断する鉄道となった。

一九一〇年の日韓合邦により日本による植民地統治が始まると、再び地方制度の見直しがなされた。一〇月一日付の朝鮮総督府令第七号では、仁川府はそのままであったが、漢城府が京城府に改称されたのみならず、開港地であった沃溝府が群山府に、務安府が木浦府に、東萊府が釜山府、昌原府が馬山府に、三和府が鎮南浦府に、義州府が新義州府に、徳源府が元山府に、それぞれ統治者にとって特徴がわかりやすい港の地名に改称された。開市地であった平壤郡は府に復帰し、一九〇八年に開港された清津港のある富寧郡も清津府に昇格され、このほか大邱郡が大邱府に昇格された。一方、港があまり使われなかった城津府、龍川府は郡に降格され、開市場がほとんど機能しなかった慶興府も郡に降格された(参考文献⑨)。

総督府は一九一三年一月二九日付総督府令第一一〇号を発し、一九一四年三月一日から道の管轄区域、府郡の管轄区域の改定を実施した。これは郡の統廃合に始まり、その下の単位である面、里、洞を改編するもので三年かけて実施された。この改定事業では府そのものが大きく改編されることはなかった(参考文献⑩)。

その後、鉄道網の発展や農業および商工業の発展にともなう人口増加で一九三〇年代には各道庁所在地が府に昇格していった。咸鏡南道の咸興が一九三〇年一月一日に、忠清南道の大田、全羅北道の全州、全羅南道の光州が一九三五年一月一日に、黄海道庁所在地の海州が一九三八年一月一日にそれぞれ郡から府に昇格した。このほか、高麗人參の産地の開城郡が一九三〇年一月一日に府に昇格し、軍港開発が進められた羅津邑(邑は町、村に相当)が一九三六年一月一日に、同じく軍港開発が進められた晋州郡が一九三九年一月一日に府に昇格した。一九四〇年代に入ると、重工業都市が府に昇格されるようになった。城津郡は港湾開発が進展をみせるとともに、一九三六年に特殊鋼を生産する日本高周波株式会社(鋼)の工場が操業を始め、一九四一年一月一日に城津府に昇格した。また、一九三〇年に日窒コンツェルンが窒素肥料工場を建てたのをはじめ、火薬工場、マグネシウム工場などの関連工場が建設されて化学工業地区を形成した興南邑は一九四四年二月一日に府に昇格した。

植民地時代に府に昇格はしなかったものの、黄海道黄州郡に

●植民地時代の府

一九一〇年の日韓合邦により日本による植民地統治が始まると、再び地方制度の見直しがなされた。一〇月一日付の朝鮮総督府令第七号では、仁川府はそのままであったが、漢城府が京城府に改称されたのみならず、開港地であった沃溝府が群山府に、務安府が木浦府に、東萊府が釜山府、昌原府が馬山府に、三和府が鎮南浦府に、義州府が新義州府に、徳源府が元山府に、それぞれ統治者にとって特徴がわかりやすい港の地名に改称された。開市地であった平壤郡は府に復帰し、一九〇八年に開港された清津港のある富寧郡も清津府に昇格され、このほか大邱郡が大邱府に昇格された。一方、港があまり使われなかった城津府、龍川府は郡に降格され、開市場がほとんど機能しなかった慶興府も郡に降格された(参考文献⑨)。

総督府は一九一三年一月二九日付総督府令第一一〇号を発し、一九一四年三月一日から道の管轄区域、府郡の管轄区域の改定を実施した。これは郡の統廃合に始まり、その下の単位である面、里、洞を改編するもので三年かけて実施された。この改定事業では府そのものが大きく改編されることはなかった(参考文献⑩)。

その後、鉄道網の発展や農業および商工業の発展にともなう人口増加で一九三〇年代には各道庁所在地が府に昇格していった。咸鏡南道の咸興が一九三〇年一月一日に、忠清南道の大田、全羅北道の全州、全羅南道の光州が一九三五年一月一日に、黄海道庁所在地の海州が一九三八年一月一日にそれぞれ郡から府に昇格した。このほか、高麗人參の産地の開城郡が一九三〇年一月一日に府に昇格し、軍港開発が進められた羅津邑(邑は町、村に相当)が一九三六年一月一日に、同じく軍港開発が進められた晋州郡が一九三九年一月一日に府に昇格した。一九四〇年代に入ると、重工業都市が府に昇格されるようになった。城津郡は港湾開発が進展をみせるとともに、一九三六年に特殊鋼を生産する日本高周波株式会社(鋼)の工場が操業を始め、一九四一年一月一日に城津府に昇格した。また、一九三〇年に日窒コンツェルンが窒素肥料工場を建てたのをはじめ、火薬工場、マグネシウム工場などの関連工場が建設されて化学工業地区を形成した興南邑は一九四四年二月一日に府に昇格した。

あった兼二浦邑は製鉄都市として
発展した。兼二浦には一九一八年
に三菱製鉄の製鉄所が完工した。

この製鉄所は当時、八幡製鉄所に
匹敵する規模のものであった。

一九四四年に発表された統計を
みると、府が二二個、そして府に
匹敵する三万人以上の人口を持つ
邑が二〇個あった(表1)。一九
四五年八月に日本の植民地統治が
終焉した朝鮮には、このうち、九
個の府と九個の邑が北緯三八度線
より北側、一二個の府と一二個の
邑が南側にあり、一九四八年にそ
れぞれ共和国政府と韓国政府の管
轄下に置かれるようになった。

● 韓国の市

一九四五年八月一五日に朝鮮が
植民地支配から解放され、北緯三
八度線の南側では九月八日に米軍
が京城に入り、一九日までに総督
府の業務を米軍政庁が引き継いだ。
解放の祝賀ムードのなかで、人々
は生活にある日本式の名称を朝鮮
語のそれに置き換えて呼ぶようにな
った。一〇月九日が「ハングル
の日」として祝われるようになり、
朝鮮語を学ぶ講座が開かれるなど、
朝鮮語の復活、普及が進められた。
地名に関しても、京城府を、首都

を意味する朝鮮の固有語で「ソウ
ル」と呼んだり、表記したりする
ことが増えてきた。

解放の二日後である一九四五年
八月一七日に京城府で朝鮮建国準
備委員会が結成され、これが中心
となって九月六日に、国号を「朝
鮮人民共和国」とすること、その
政治組織である「中央人民委員
会」を組織することを発表した。

これによって、左翼の人々によつ
て各地方に「人民委員会」が組織
されるようになった。九月一二日
に京城府に組織された人民委員会
の名称は「京城市人民委員会」で
あり、委員長は共産主義者の崔元
澤であった。ハングルの日祝賀行
事が開催されることが一〇月一日
に発表されると、京城市人民委員
会はすぐに「ソウル市人民委員
会」に改称した(参考文献⑪)。
ソウル市人民委員会を含め、一〇
月末までに南朝鮮では一二個の
「市人民委員会」が設置された。

しかし、「朝鮮人民共和国」と
いう国号も人民委員会も軍政庁か
ら認められなかった。各地方の人
民委員会も弾圧を受けるようにな
り、左翼の人々の地下活動に変貌
していった。地上に残ったのは京
城をソウルと呼ぶことと、府を市

と呼ぶことであった。

軍政庁は、一九四六年九月一八
日付法令第一〇六号で、二八日か
ら京城府を「ソウル特別市」に改
称した。続いて一〇月一日には市
内の行政区域に関して、日本式の
「町」「通」「丁目」が「洞」「路」
「街」に改められた。ただし、ソ
ウルの外で府の名称は引き続き用
いられ、仁川府、開城府、大田府、
全州府、群山府、光州府、木浦府、
大邱府、釜山府、馬山府はそのま
まであった。一九四八年八月一五
日に大韓民国政府が樹立されるま
でに、清州邑、春川邑、裡里邑が
府に昇格した。韓国では一九四九
年八月一五日にすべての府を市に
改称したが、この直前に水原邑、
麗水邑、順天邑、浦項邑、金泉邑、
晋州邑が駆け込み式に府に昇格さ
れた。韓国でソウル特別市の次に
市になった府は都合二二個であつ
た。うち開城市は朝鮮戦争の結果、
韓国の所屬を離れた。

現在、韓国には、道の下に七六
個の市、ソウル特別市のように道
と同級の市が八個ある。

● 朝鮮民主主義人民共和国の市

一九四五年八月にソ連軍が占領
した北緯三八度線以北では、各地

方に朝鮮人自治組織である人民委
員会が結成されたが、南側と違つ
て、ソ連軍は人民委員会に行政機
関の業務を引き継がせた。人民委
員会が地方の行政機関としての体
裁をもつとも早く整えたのは咸鏡
南道であり、八月末までに道人民
委員会の下、三個の市人民委員会
と一六個の郡人民委員会が置かれ、
郡人民委員会の下に一二九個の面
人民委員会が置かれた。これに
よって咸興、興南、元山の三府は
それぞれ咸興市、興南市、元山市
になった(参考文献⑫)。元山市は
一九四六年九月五日に江原道に所
属が変更された。

咸鏡南道で府が市に変更される
前に「市」が用いられたことが確
認されるのは、平壤で八月二〇日
に共産主義者の組織が結成した
「朝鮮共産党平壤市党部」である。
この組織が「市」を名乗ったのは
中華民国の地方制度からの影響で
ある可能性が高い。一二月二〇日
に開かれた朝鮮共産党平壤市党部
第一次代表者会で行われた活動総
括では、中国共産党にいた経歴の
ある党員の役割が大きかったと記
録されている(参考文献⑬)。
平壤のある平安南道には自治組
織として平安南道人民政治委員会

とその下の平壤府委員会が八月二七日に組織され、道庁と府庁の業務を接収した。一月二十四日、平安南道人民政治委員会は咸鏡南道人民委員会に変わって平安南道人民委員会に改称し、一月二十五日、平壤府は平壤市に改称された。同じころ、鎮南浦府は南浦市に、海州府は海州市に、羅津府は羅津市に、清津府は二分されて清津市と羅南市に、城津郡は城津市に改称された。なお、平壤市は翌四六年九月五日に、平安南道の所屬を離れ、道級の「平壤特別市」となった。

● 結び

現在朝鮮半島の南北にある市の起源は朝鮮王朝時代に開港地、開市地が府になったことである。これは植民地時代に引き継がれ、人口増加によって府が二二個、そして府に匹敵する三万人以上の人口を持つ邑が二〇個となり、解放後に韓国と共和国に引き継がれた。解放後、行政区画の名称に市を使ったのは三八度線以北のほうであった。最初に平壤に市を付けて呼び、義者たちが平壤に市を付けて呼び、次に咸鏡南道で地方行政機関の体系が成立したときに咸興府、興南府、元山府が市に改称された。三八度線以南でも最初に京城府を「京城市」「ソウル市」と呼んだのは左翼の人々が組織した人民委員会であった。南側の共産主義者を中心とする左翼の人々が府を市に改称しようとしたのは北側の人民委員会を模倣しようとしたためであると思われる。

南側の人民委員会は米軍政から拒否されて弾圧されたものの、「ソウル市」という名称は人々に浸透し、米軍政も京城府をソウル特別市に改称した。北側で一九四八年に共和国政府が成立したときにはすべての府がすでに市になっ

ており、南側の韓国政府は一九四九年八月にすべての府を市に改称した。

平壤の政治組織で市が最初に使われたのは、中国から帰国した人々の影響によるものであった可能性が高く、それが京城まで伝播したと考えられる。ただし、府は日本人が作った行政区画の名称であると錯覚され、「倭色」のある言葉として排斥されて、中国や日本で使っている市が選ばれたというだけのことかもしれない。

(なががわ まさひこ/アジア経済研究所 動向分析研究グループ)

- ① 『官報』(内閣記録局官報係) 一八九五年五月二八日第五〇号(『舊韓國官報』開國五〇四年一八九五年(下) 第二卷、ソウル、亞細亞文化社、一九七三年、七九三―八一五ページ)。
- ② 『(内閣記録局官報係) 一八九五年五月二八日第三九七号(『舊韓國官報』建陽元年一八九六年年) 第三卷、ソウル、亞細亞文化社一九七三年、四九六―五〇五ページ)。
- ③ 『(議政府総務局官報課) 一八九七年九月一四日第七四一号(『舊韓國官報』建陽二年光武元年一八九七年) 第二卷、ソウル、亞細亞文化社、一九七三年、五五九―五六二ページ)。
- ④ 『(議政府総務局官報課) 一七九九年五月一〇日第一二五七号(『舊韓國官報』光武三年一八九九年) 第七卷、ソウル、亞細亞文化社、一九七三年、三二七―三二八ページ)。

ル、亞細亞文化社、一九七三年、三二七―三二八ページ)。

⑤ 『(議政府総務局官報課) 一九〇〇年九月六日第一六七二号(『舊韓國官報』光武四年一九〇〇年) 第九卷、ソウル、亞細亞文化社一九七三年、八九五―八九八ページ)。

⑥ 福田徳三『経済学研究前編』同文館、一九一五年一三二ページ)。

⑦ 『官報』(議政府総務局官報課) 一九〇三年七月六日第二五五七号(『舊韓國官報』光武七年一九〇三年) 第一〇卷、ソウル、亞細亞文化社、一九七三年、五三一―五三四ページ)。

⑧ 『(議政府官報課) 一九〇六年九月二八日第一六七二号(『舊韓國官報』光武七年一九〇三年) 第一〇卷、ソウル、亞細亞文化社、一九七四年、八一〇―八二五ページ)。

⑨ 『朝鮮總督府官報』一九一〇年一〇月一日第二九号)。

⑩ 朝鮮總督府令一九一三年一月二十九日第一一〇号(越智唯七編『新旧対照朝鮮全道府郡面里洞名一覽』草風館、一九九四年、一一二―一五五ページ)。

⑪ 『朝鮮通信』(京城) 一九四五年九月二六日および一〇月二日(『朝鮮通信』自創刊号一九四五年九月四日) 至第五〇号(一九四五年一〇月三日) ソウル、亞細亞文化社、一九九二年、一四一―一五二および一九五―二〇八ページ)。

⑫ 『朝鮮中央年鑑』一九五〇年版、一九五一年一九六ページ)。「平壤市党第一次工作総決報告草案」(翰林大学校アジア文化研究所編『朝鮮共産党文献資料集』一九四五―四六) 春川、翰林大学校出版部、一九九三年、四七二―四八九ページ)。

⑬ 『朝鮮地名便覧―平安北道』出版地記載なし、社会科学出版社、二〇〇一年)。